

MAX STUDY GROUP

Vol. 9 2016年10月22日

第9回 レポート

A テーマ設定

今回は、2本立てです。まず、前半は「グローバルキャリアプロジェクト」をテーマにしたディスカッションを行いました。後半は前回に引き続き「高大接続システム改革」をターゲットとし、特にどのようにテストが変わっていくのか、という点に特化してワークショップを行いました。

資料

「高大接続システム改革に向けて 中間作業 その1 (MSG 研究レポート)」

B コンテンツ

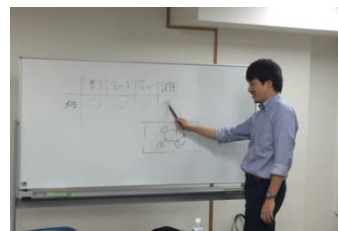
1 グローバルキャリアプロジェクト

今回から数回にわたって、前半部分で、渡邊大輔先生にグローバルキャリアの実践報告をしていただき、それに関する議論やフィードバックを行います。

渡邊先生は中3の総合学習の取り組みとして、グローバルキャリアプロジェクトの開発を続けています。アクティブラーニング、グローバルキャリア、そして課題解決、すべての面において非常によく練られたプログラムです。そのプログラムを今年も展開していくわけですが、渡邊先生から「勉強会の中でディスカッションし、意見をもらいたい」という申し出をいただきました。

そこで、今回の勉強会の中で、彼からプログラムデザイン、指導ポイント、課題、試行錯誤している点などを全てオープンに共有してもらい、より良いプログラムになるようにと、一緒に勉強、議論をいたしました。

プログラムの概要、そこで出た意見を次ページからまとめました。



私もこのレポートを書くためにディスカッションを録音しましたが、聞けば聞くほど、今後のグローバルキャリア策定のアイデアやヒントが得られ、大変興味深いものでした。

グローバルキャリアプログラム 概要

プロジェクト課題 「2020年、渋谷を訪れる外国人に happy になってもらおう！」

目的

- ・ 探求活動(課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現→振り返り・考えの更新)を通し、批判的思考(情報を抽出し、論理的に組み立てる力)・協働的思考(他者との共通点や違いを理解し、社会に参画する力)・創造的思考(問題を発見し、解決策を生み出す力)を深める。
- ・ 外国人の目線(グローバル)で渋谷(ローカル)を捉えることで、多様な人々の立場を理解する姿勢を養う。
- ・ ICT 設備を活用した教育活動の可能性を探る。

実施計画

- ・ 週に1時間の総合の時間を使って、11週にわたるプロジェクトを行う。
- ・ 渡辺先生が各クラスの総合の時間に入り、担任とともに
- ・ グループでプロジェクトを制作し、クラス内で発表後、クラス代表が学年全体に発表をする。校外講師から講評を受ける。

<各時限の概要>

- 1 合同レクチャー「社会・世界・未来を思考しよう」
- 2 グループワーク① <思考しよう①魅力> 「渋谷の魅力は何だろう？」
- 3 グループワーク② <思考しよう②目的> 「旅行の目的は何だろう？」
- 4 グループワーク③ <思考しよう③対象> 「訪日外国人の目線に立ってみよう」
- 5 グループワーク④ <プロジェクト課題の発表・グループ企画立案Ⅰ>
- 6 グループワーク⑤ <仮発表・フィードバック>
- 7 グループワーク⑥ <思考しよう④伝える> 「どんな伝え方があるだろう？」
- 8 グループワーク⑦ <グループ企画立案Ⅱ>
- 9 グループワーク⑧ <グループ企画立案Ⅲ>
- 10 クラス内発表
- 11 学年発表：クラス代表グループ

<ディスカッションにおける議論 - 抜粋>

- ・ 渋谷の魅力を何も無い状態では考えても思いつかない。グループワーク③の「訪日外国人の目線に立ってみよう」という活動を先に行う方が、どの視点で渋谷を見るかがわかるので、良いのではないか。
- ・ 生徒の思考はまだ限定的であり、意見が偏る可能性もあるのではないか。そこをどのようにファシリテ

ートしていくのか。

- ・「happy」という定義付けも含めて、生徒に任せているわけだが、その言葉の意味合いが曖昧なので、このプロジェクトが求めているのが具体的にイメージしづらい部分がある。happy というテーマがプロジェクト企画とも連動する。先に課題を設定させるところができれば、happy の方向性も定まるのではないか。
- ・中3に求めるべきものは何かはっきりさせたい。グローバルキャリアの導入として、生徒に何を考えてほしいのか、何を身に付けてほしいのかを定める必要がある。アクティビティを設計する前に、大きなビジョンで軸となる目標を定めるとよい。
- ・思考というと、フリーに発想を求めたくなるが、中3という導入段階なので、フォーマットに沿って自分たちの思考を積み重ねたほうがよい。そして、そのワークシートの積み重ねが、そのままプロジェクトに活かせるようにしていくデザインでよいのではないか。
- ・グローバルキャリアに対する動機づけや、課題解決・思考力の下地がしっかりあるかどうか重要であり、その点については、ポイントを絞りつつも、深く議論してもいいのではないか。
- ・課題解決にはミッションと立場が必要。何の立場で何のためにプロジェクトをするのかという設定が重要になる。例えば、「2020年をきっかけに東京を国際都市するために都から発案を要請された」とか「仮想企業として都市開発をする」など。立場とミッションが分かれば、目的や観客がはっきりするので、プレゼン手法も変わるだろう。
- ・グループワーク①～③は「思考しよう」という授業目標だが、そこにある「魅力」「目的」「対象」は思考そのものではなく、トピックである。思考を授業目標にするのであれば、「分析しよう」「課題設定しよう」など、思考としてのゴールが教員、生徒で共有されるべきであり、そうすればファシリテーションもうまくいくだろう。
- ・プレゼンだけでなく、CMのコンテを発表するなどというプロダクトのゴールも定めるのも1つだろう。

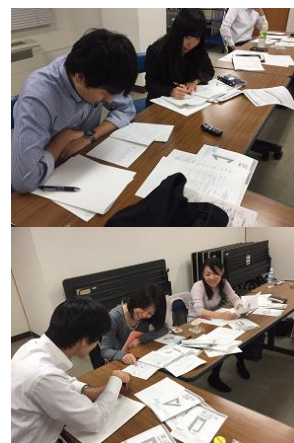
2 入試改革ワーキンググループ

後半は入試改革ですが、今回の焦点はベネッセの模試です。

ベネッセが今年から提供している「中学総合学力調査」という新形式の模試を作成しました。特徴としては、①従来の国数英という3教科に加えて、教科融合という教科ができたこと、②思考力、表現力、判断力という3つの力を意識した問い、問題構成になっている、という2点が主にあげられます。

なお、この模試を勉強会の題材に使うことはベネッセから許可をもらっていますが、出題の共有や問題の掲載はできませんので、ご了承ください。

ディスカッションは、教科に分かれて行いました。数英の先生方はその教科



を、それ以外の教科の先生方は、教科融合を担当しました(国語は出席者がいませんでしたので、割愛します)。

具体的には、中間レポートで分析を共有したいと思います。

なお、実際の議論を共有する前に、「このテストは万人のテストではない、中高一貫の上位校をターゲットにしたテストである」という前提をご確認ください。ベネッセの意図がそうかどうかは分かりませんが、少なくとも私たちの分析では、幅広いレベルの生徒、効率の生徒にこれを求めていくことは非現実的である、という結論に至っています。

【各教科に共通した意見】

- ・ 実社会、日常生活につなげた問題が顕著である。
- ・ いろいろな情報や知識を統合させた出題になっている。
- ・ 知識やスキルを活用させることに主眼を置いているが、その分、求められているルールや条件を読み出し、それをもとに分析、判断することが重要になっている。
- ・ 思考力というより、「理解力」が大きく問われている。文章理解、グラフの読み取り、条件分析など、理解力を育てる取り組みが重要になるだろう。
- ・ 記述問題はオープンエンドのものもあり、採点基準がどのようになっているのか、教員も分析する必要がある。
- ・ 単に正解を求めるテストより、「これってどうやったら解けるの」という感覚が生徒に残るという意味では、探求を求めるものだろう。
- ・ 授業での取り組みがどこまで生かせるのかは疑問である。また、授業の中でこのような問題に対応していくことはどこまで可能なのか。場合によっては地頭がものをいうテストかもしれない。
- ・ 中学入試に似ている要素があるのではないか。ある意味、通常カリキュラムを逸脱した指導が必要である。
- ・ 中学で急にできるものではなく、小学生のころから、このような問題に取り組んでいけない。
- ・ 現状の教育現場で、教員がこの種の問題を作ることができない。もしくは相当なトレーニングと労力を要する。
- ・ 今までは能力が低い(地頭が決してよくない生徒)も努力で何とかなる部分があったが、このような形式の問題を問われると、そのような生徒が地道に努力しても解けるようにはならないのではないか、という現実的な危惧がある。

教科別のブレインストーミング

【数学】

- ・ 今までであれば計算問題から始まっていたが、出だしから文章問題となっている。
- ・ ただ計算するだけでなく、文章の中からルールや条件を読みだせるか、ということが重要になってくる。交通事故、オリンピック、都市問題など、日常生活、実社会のコンテキストの中で、数学知識応用することを求めている。
- ・ グラフの問題も、条件を見ながら、思考し、分析し、実際に計算しなくては答えが出ない問題がある。
- ・ 「都市部と農村部の違いを考える時にどういう資料があればよいか」など、オープンエンドの問題の記述問題も出題されている。
- ・ 中学の問題も、その学年で完結する問題ではなく、次の学年や高校の内容に発展的につながる出題がされている。
- ・ どのように考えさせるのか、そしてそれをどのように記述で答えるのか、思考力、表現力、判断力という要素が問題に組み込まれている。
- ・ 教科書の発展問題よりも難易度が高く、数学を得意としていない生徒は1題目からつまづくだろう。
- ・ これまでのように例題、演習問題をやるというような授業形態では、これらの問題を解けるようにはならない。教科書の行間を読み、「なぜ」と問うような授業をうまくしていかななくてはいけない。
- ・ このような問題を果たして「数学」というテストで行う必要があるのか。これを見る限り、数学というテストも「教科融合」という観点で見えていかなくてはならない。
- ・ 単純な計算問題などがほとんど入っていないが、それらの知識も、基礎数学力という意味では必要不可欠だろう。
- ・ 授業での学習がどこまで生かされるのだろうか。場合によっては、数学的な地頭がものを言うのではないか。

【英語】

- ・ 実際に生徒たちが英語を使う状況、立場、が具体的に設定してあり、自分事として英語の問題に取り組ませようとしている。「あなたがこの状況で～するとき」という具体的な言語使用の設定が生徒自身の立場でなされている。
- ・ タスク(=ミッション)が明確化されていて、例えばリスニングでは、何のために聞くのか、どのような情報を獲得すべきなのかが重視されている。
- ・ 一方で、従来型の説明文や物語といったリーディングがない。色々な読解のジャンルに触れることも大切なのではないのか。中学生だから、あくまでも実際の言語利用にこだわっているのかもしれないが、どこかの段階で普通のリーディングを導入することも大切なのではないか。
- ・ 中1、2のテストで、オーダーをする設定において、roast beef、camembert cheese などが出され、注で意味が与えられている。また会話文にも注がある。今までのテストではこのような語が出てくることもこのような注の与えられ方も考えられなかった。
- ・ 思考力のような問題も出ているが、問のアプローチが異なるだけで、理解できていれば答えられる問題も多くある。

- ・表現力については、シルエットを見て、それを英語で説明する問題があるが、単に説明するだけではなく、どう表現するのかということが問われているのだろう。どのような英語表現を使えるかということに加え、どのように説明をするのかという表現技術も焦点に当てられている。
- ・ライティングの問題でも、言語の使用場面と働きが意識されており、「依頼する」などといった機能、Can-Doに関わる出題がなされている。前指導要領でも言われていたことなので、これまででもそのような出題があったが、このテストではより明確に強調された形になっている。
- ・ライティングでは、日本語を英語に直しなさい、などのような問題がなく、与えられた状況の中で自分で表現を考える、というような問題が出されている。文法が正しいか、間違っているかという指標ではなく、適切に返答ができていくかというプラグマティックな要素が採点対象になる。ルーブリックまで必要かは分からないが、少なくともコミュニケーション面の基準が必要だろう。
- ・文法、単語という英語の知識問題はなく、技能に特化した問題になっている。英語外部試験と同じような作りになっている。
- ・判断力については、「どちらかを選び、その理由を答える」というものが該当する。しかし、2つを選んで、理由を答える、というだけで「判断力」の評価と言えるかは疑問の残るところである。
- ・中学の英語の模試としては新しいものだが、センター試験もグラフ読み取り問題があるように、英語の試験としては、今までのものと根本的に変わらない。英語は外部試験も含めて、世界基準のテストに囲まれており、大きなショックはない。

【教科融合】

- ・このレベルの問題を簡単にできる生徒はいないだろう。できない生徒は振り落とされる。要領の悪い生徒や頑張っても力がつかない生徒もいるが、知識型でも点数が伸び悩むのに、このようなタイプの問題であれば、より一層学力差が生じる。またフォローアップもしづらい。
- ・強化が融合されたというよりは、新しい教科が創造されたという感じがする。
- ・問題を答える前に、問題を読む、理解する力が大きく試される。文章の中に多くの情報が入っており、まずは、それを整理する能力が要される。
- ・もともとの知識で解くのではなく、与えられた情報を読み取り、考えて答えを探らなくてははいけない。
- ・「象形文字」という言葉があるが、それが何かを書いていないので、それを知っていることを求められるのか、文章の中からエッセンスを見抜いて理解することが求められる。
- ・解けてもモヤっとする。このテストに向けて勉強するということも難しく、教員も指導することができないだろう。
- ・覚えるだけでは点数につながらず、そのことに探求心を刺激され、より勉強を促進させる生徒と、覚えても意味がないので、勉強が停滞する生徒と別れることもあるだろう。

C 次回に向けて

今回は、これまでの分析、議論を踏まえて、「新しい出題」を自ら考えるというワーキンググループを組んでいきます。

D Review and Reflection

小川先生

今回は2回目の高大接続改革に関する検討作業が主題であった。本題の前に、今回の勉強会では、私立女子校中学3年生を対象とした総合的な学習の時間の授業プラン(実際に11月～2月までの3ヶ月をかけて行なう取り組み)についてのディスカッションを行なった。議論の中で、授業立案者が求めたいことと中学3年生にできることのバランスをとることの難しさを感じた。何を本質的なテーマにすえていくかが重要で、シンプルにしなければその本質がぼやけてしまうという。

後半では高大接続改革を見据えてベネッセが実施している、「中学総合学力調査」の内容の検討を行った。グループごとに「数学」「国語」「英語」「教科融合」の問題を検討していった。私は、「教科融合」の問題を担当した。初見の感想は複雑なものであったが、ワクワクしたという表現が適切かもしれない。私は社会科の教員であるが、このような問題に生徒をチャレンジさせることができるのは面白いと感じた。一方で、他教科の問題も含めて、意見として出た内容としては、「思考力」よりも「読解力」を必要とするものなのではないかということであった。また、教員の立場としてどのように教えていくことでこの様な問題を解く能力を育てられるのかということについて懸念が生じた。自分自身が担当している生徒の力を考えたときに、非常に厳しいテストであることは間違いない。従来型のテストであれば量をこなすことで相応の結果が得られたが、この様なテストについては能力の低い生徒にとって上昇するチャンスが限られてしまうという心配も生じている。この様な形式のテストが、高大接続改革のゴールとして目指されているかは定かではないが、教員側の意識改革の必要性を改めて強く感じた。